MOZAM TIMES

VOL. 2

モザンビークを
隊員の活動を
知る。

MOZAM TIMES Vol. 2

隊員の活動、モザンビークを知る。

Conteúdos

03 巻頭特集
帰国隊員インタビュー
28-1 久長 竜太

05 隊員コラボ企画
28-1 北橋 雅子

11 地域紹介
マシンガ リシンガ
リバウエ

13 隊員活動
27-4 藤田 絵美子

17 隊員活動
28-4 寺田 篤哉

20 SNAPカプラナ特集

21 隊員活動
28-3 佐野 卓也

23 地域紹介
マプト ナンプラ

29 ARTE RUPESTRE

35 特別寄稿
「M」 小林調整員

43 執筆協力者

Revista de voluntário da JICA
Moçambique 2018

骨と筋肉が透けて見える男

マプトの中心地にある中央病院で理学療法士として学生に授業を行っている魔法の目の持ち主。ナンプラに赴任し１年がたった頃、とある理由からマプトへ任地変更をすることに。ふと見ればいつも勉強していた勤勉な彼にモチベーション維持の秘訣や２年間の活動内容をきく。

平成 28 年度 1 次隊
理学療法士
久長　竜太

活動の内容は？

「月水木は朝の 7 時から 8 時 45 分まで授業があって火曜と金曜は中央病院やほかの地域の病院にいって学生に実習を教えてる。実習監督だね。授業は理学療法学科じゃなく看護部と義肢装具師部で授業やってるんだよね。義肢装具士っていうのは義足を作る人ね。その人たちに解剖学と理学療法のことを教えてる。もともとそれは自分の担当ではなかったんだけど理学療法学科には 2 月から新しい学生が入る予定だったのに結局入ってこなかったから急遽お願いしてこの二つの学科に授業をすることにしたんだ。」

生徒の反応は？

「他の先生とちょっと違うやり方でやってるからそれに関しては食いつきがすごくよかったかな。一般的な授業では教科書を読んでスライドを使ったりするけど、おれは実際にペン使って骨や筋肉を書いてるんだよ、体に。それはすごく興味を引くみたいで食いつきがいいね。

今は試験問題を作って採点してるけどおもしろいよ。彼らが、何が苦手なのかがわかるような問題を作ってる。例えば、いつも授業で右の肩甲骨しか書いてなかったのね、わざと。それで試験では左の肩甲骨をだしたの。

まぁ反転させるだけじゃん。それができるか。まぁ、できない（笑）でもそれがわかるとこの子達に対するアプローチの仕方を変えないといけないなとかがわかってくるし面白いね。」

―― そういえばなぜモザン人のお年寄りの腰はまがってないんでしょうか。

「体のつくりがやっぱり違うよね。モザン人の骨盤を触ったときに、まぁみんなも見ればわかるけど、骨盤がたおれてるんだよね。骨盤が倒れて背中がすごい反り腰になってて横から見ると S 字カーブになってるよね。骨盤を倒す筋肉っていうのは姿勢をつかさどる筋肉なのよ。腸腰筋っていうんだけど、それがすごく発達してるからまがってないんじゃないかな。日本人はそってないじゃん。弱いんだよその筋肉が。コアだよコア (笑)」

―― ちょうど 1 年たった時に任地変更したんですね。どうして任地変更したんですか？

「看護師に手をだしたから (笑)」

―― なるほどなるほど

「うそだからね！冗談だよ！7 月に生徒が卒業して次の生徒がくると思ってたら入ってこなかったの。それでマプトには学生がいるからってことで 8 月から急遽マプトに。任地変更はデメリットメリットがあるけど、北部も南部も両方知れたし、それはメリットだった。住む環境も全然違うし発音も違うんだよね。最初こっちの発音が聞きづらかったな。一から新しい人間関係を作らないといけないっていうのも大変だった。」

―― 仕事をしていて大変なことはありますか？

「やっぱり言語だね。まぁ伝わるんだけど 100%や細かいニュアンスはなかなか伝わらない。毎日勉強してる、それなのに、だからね。専門職って専門用語しっかり使わないとだめなんよね。っていうのも使わないと生徒にすごくばかにされる。骨、筋肉、血管や神経とかを全部覚えないといけないからそれを違う単語で言ってしまったり発音が違うと生徒にばかにされたり、質問にこなくなったり。それはつらかったかな。でも 2 年目に入ってやっと先生らしい貫禄がでてきたかなー、professor としてね。

人間関係とかはもうあんまり深く考えないようにしてる（笑）気にしないように。」

―― 語学に関してモチベーションがさがったりやる気がでないときはどうしてるんですか。

「他の言語、英語を勉強するとか。あとはワンランクレベルを下げるとか、すごい簡単なポル語のやつに戻るとかね。たとえばリスニングのレベルを下げると理解できるからモチベーションも維持しやすいかな。でも語学の勉強というか授業の前の準備は結構してる。一つの授業に最低でも 2 時間はかけてるかな。授業で 105 分しゃべらないといけないからさ。」

―― 活動で印象に残ってることは？

「忘れられない、ターニングポイントになった出来事があるんだけど。（詳しくは総会で）

それまでは学生に教えないといけないとか、同僚に指導しないといけないって思ってたけど、目の前の患者ひとりひとりとしっかり向き合えば学生や同僚もそれを見て動いてくれるんじゃないかって。そこから自分の考えが変わった。コアができた感じ。何があってもあの女の子みたいな気持ちにさせたらいけないっていう思いがあるから、たとえ学生や同僚にいやなこといわれても、ただおれは目の前の患者さんを治せばいいんだって、全然気にしなくなった。」

―― 最後に後輩に向けてのメッセージをお願いします。

「モザンピークは大好きだな。それが、活動がうまくいく秘訣だと思うよ、モザンを好きになるのが。モザンピークを好きになればおのずと自分が何をすべきかがみえてくると思う。

好きだから行動するし、好きだからアクション起こすし、好きだから考える。

あとはいろんなところにいくことだよね。いろんなところで人脈を作って友達作って点と点をいっぱい作って結んでいって…その繰り返しだね。そしたら何かが見えてくると思う。がんばれ！」

01

「～したいんですが協力して下さい！」「～したいんですが意見下さい！」など隊員での協力者・意見募集コーナー。
この7月に任期終了の北橋さんが、活動の中で作成した絵本を使って、学生たちとともに活動を続けてくれる人を募集している。

28年度１次隊
PC インストラクター　北橋 雅子

セント・トーマス大学というマプトのカトリック系大学で、コンピュータ技術を教える傍ら、小中学校で絵本の読み聞かせをやってきました。モザンビークでは本は貴重品です。こども達が気軽に手に取って楽しめる絵本はありません。日本の絵本を読んであげると、みんな興味津々ですが、その絵本を子供たちが自分で読み返すということができません。だから、オリジナルの絵本をつくって、子供たちが自分で好きなだけ読めるように、コピーを配りたい、と思っていました。

それが、残り任期半年になって、かないました。絵を描くのが趣味の 3 人の学生に出会えたからです。しかも、そのうちの一人、ロザーナが、モザンビークの昔話を集めていたのです。彼女が持っていたお話の中の３つに、3 人がそれぞれ絵を描いて、10 ページの絵本をつくることができました。この 3 人は、大学ではじめた日本語クラブのメンバーです。

日本語クラブでは、日本の絵本のお話をドラマ化して、日本語やポルトガル語で演じる活動をしていました。アニメが大好きなメンバーは、アニメの登場人物になったような気分で、楽しんでいました。

最初は、セント・トーマス大学の学生のためのクラブでしたが、そのうち、他の大学の学生も来るようになりました。絵を描いてくれた 3 人はみんな、エドアルド・モンドラーネ大学の学生です。

一人で小中学校におじゃまして絵本の読み聞かせをしていましたが、日本語クラブの学生達といっしょにおじゃまする機会も得ることができるようになりました。この活動が、私の任期終了とともに終わってしまうのはもったいない、と思うのです。学生達も子供たちに劇を見せるのをとても楽しんでくれています。学生達といっしょに、この活動を続けてくれる人を募集します。

絵本は、デジタルなので、みんなで共有することができます。学生といっしょに活動できなくても、絵本を使って、何かしてくれてもいいです。ただ、絵を描いたのがこの 3 人であること、つまり絵のコピーライトを明示してくれれば、どういうふうに使ってくれてもいいと思います。モザンビークの昔話は、あまり知られておらず、このままでは消えてしまいそうです。これを題材にモザンビークの文化や歴史について、こども達や先生達といっしょに考えてみるのもいいのでは。（絵本のデジタルデータはボランティア共有フォルダーにあります）

私の本来の活動、コンピュータ技術を教える、という活動は障害だらけでうまくいかないことばかりでした。日本語クラブのおかげで、ノイローゼにならずにすみました。こういう課外活動で息抜きして下さい。

APRESENTAÇÃO

01

A Filha de Lua

A filha da lua

Um dia, um homem caminhando pelo seja local, viu uma jovem muito bonita que estava a pentear o cabelo. Aquela jovem era conhecida como a filha da lua.

Lua: Você aí! Consigo ver você atrás dos arbustos. O que quer?
Homem: Eu gostaria de me casar com a sua filha.
Lua: Só posso dar-lhe a minha filha se você prometer nunca deixar a ela trabalhar. Entendi. Eu prometo.

O homem levou a filha da lua para a casa dele.

Homem: Mãe, minhas irmãs, olhem! Mãe: Quem é essa jovem?
Homem: Ela é a minha esposa. Não a deixem trabalhar, porque eu assim prometi a lua. Sem trabalhar, o que ela faz?
Irmã1: Por que se casa com tal jovem?
Irmã2: Ela nunca trabalhou. É mau.
Irmã3:

Não do seguinte, o homem ia trabalhar e as irmãs e a noiva foram ao rio. Elas tinham uma grande quantidade de roupas para lavar.

02

A Noiva e A Cabra Mágica

A noiva e a cabra mágica

Era uma vez, uma moça chamada Bale. Ia casar, mudar de vida e ter a sua própria família. Nas vésperas do seu casamento, Bale pediu uma cabra (Mamedja) que tinha a ver coisa. Mamedja era a cabra. Ela é que fazia todos os trabalhos domésticos e era linda de como nunca antes vistas, uma verdadeira harmonia celestial.

Bale: Mãe, poderia dar-me Mamedja?
Mãe: O quê?! — Tu sabes que a Mamedja é como se fosse minha filha. Não a quero perder, principalmente agora que te vais embora.
Bale: Por favor dá-me — sabe que não cozinho bem ainda, e lá no meu lar há muita coisa por fazer, muitos trabalhos domésticos, por favor não quero passar vergonha, não quero perder o ser.
Mãe: Está bem — vou dar-lhe, mas com uma condição. Mamedja ficará todo o dia contigo, e não deseos que alguém a veja por nada, ouviste bem? Promete-me — promete-me isso.
Bale: Entendi.

Bale: Mamedja, por favor, vem comigo.
Mamedja: Bem, acho que tenho que ir contigo. Tu não podes fazer nenhum trabalho doméstico.
Bale: Ñaa, sim. Todos os dias assim que eu acordar, eu vou à machamba, faz o trabalho doméstico, por favor.
Mamedja: Ok, ok.

03

O Rato e O Caçador

O rato e o caçador

Existia um caçador que usava armadilhas, atirado nuvas no chão. Ele teba uma mulher coga e três filhos. Um dia, quando visitava as suas armadilhas, encontrou um rato que lhe perguntou:

Leão: Bom dia, senhor! O que faz por aqui no meu território?
Caçador: Ando a ver se as minhas armadilhas apanharam alguma coisa.
Leão: Porque é meu território aqui, tem que me dar a próxima presa.
Caçador: Hmmm, ok.

Passado algum tempo, o caçador resolveu fazer uma viagem mais longa para visitar alguns amigos e não estava no terreno dos

Mulher: Não há comida. O que eu vou fazer? O meu marido não está aqui e sou cega. Oh, eu não sei como devo fazer.
Filho1: Mãe, estou com fome.
Filho2: Mãe, estou a morrer de fome.
Filho3: Mãe, quero comer alguma coisa.
Mulher: Entendo. Esperem um pouco. Tenho que encontrar algo para comer. Pode ser, em uma armadilha ...
Kyasar (Gritou):

Como era coga, ela caiu em uma das armadilhas. O rato que estava entre os arbustos viu o que acontecera e organizou o caçador voltar para entregar-lhe a presa, conforme o combinado.

日本語版も一緒にGoogle ドライブ→「モザンビーク昔話」のフォルダにあげています。ぜひ一度目を通してみてください。どのように使っていただいても大丈夫です。

2018.4.6 @Escola primaria Costa do sol

7 人の学生たちもとても楽しそうに演じていた。

騒いでいた子どもたちも劇が始まると夢中に。

小原知恵さんの活動先である、Costa do sol 小学校にて彼らの活動を見学することができた。集まった生徒は約 100 人。始まる前は元気に騒いでいた生徒も、劇が始まると身を乗り出し、きらきらした目で見ていた。

絵本を作ったのはこちらの３人！

Rosana

今（2018 年現在）20 歳。大学で海洋生物学を勉強しています。将来、Ponta do Ouro のドルフィンセンターで働きたいそうです。このセンターはイルカの保護や海洋資源保護についての研究もしています。ロザーナは、日本語クラブでリーダー的な存在です。彼女がいると、劇の配役や進行がスムーズに進みます。でも、どちらかと言えば、シャイな性格です。控えめなところは日本人的です。彼女はカテンベの孤児院での奉仕活動もしています。社会の役に立ちたい、という思いがあるのでしょう。

Ruben

今(2018年現在)22歳。大学で建築を勉強しています。将来は建築家志望。絵を描くのが好きで、油絵や水彩画も描きます。最近は、デジタルで、いろいろなツールを使っての作品作りにハマってるそうです。日本語クラブの中で大人気の「進撃の巨人」にちなんで、みんなからティタン（巨人）と呼ばれるほど背が高くてがっしりしてますが、その外見とは裏腹、とっても気がやさしくて繊細です。演じる声も、みんなの中で一番小さいんです！

Harisse

今（2018 年現在）21 歳。大学でルーベンといっしょに建築を勉強しています。将来は一応建築家志望。彼には、もうひとつの夢があります。それは漫画家になることです。いつか日本へ行って、漫画家のアシスタントをしたいそうです。彼が絵本のために描いてくれた絵を見れば、その気持ちがよくわかります。彼は武道にも興味があって、今剣道をはじめたところです。以前はテコンドーをやっていたそうです。アニメも好きで、手描きのパラパラアニメを描いたりしてます。多才ですね。

Maxixie, Inhambane

Maxixeのビーチには数えきれないほどのカニが生息している。船を待っている間に訪れてみては。

»Local que RECOMENDO

おすすめスポットきいてみました！

01 ～秘境スポット編～

今回紹介してもらうのはリシンガ・マシンガ・シャイシャイの3か所。どこも行くのに少しばかり時間がかかるが、のんびりとした旅ができそうな所ばかり。

NIASSA

LICHINGA

リシンガといえばイチゴが有名。リシンガの涼しい気候を生かし、植民地時代にポルトガル人から教えられたそう。ポルトガル人えらい!マプトには南ア製の高い糸後があるが、ここでは破格のコップ一杯山盛りで 50メティカイスで購入できる。リシンガの糸後は年々大きく、甘くなっているようで、日本のイチゴにも引けを取らないほどのおいしさ!

もう一つの名産、ヨーグルトとともに飲むと絶品！

日本ではイチゴ狩りというと、ビニールハウスの中ですることが多いが、ここでは山の畑に大量にイチゴがなっており、広大な土地の中で本当の意味でのイチゴ狩りができる。大自然の中で涼しい風に吹かれながら、イチゴを頬張りながら集めるのはとても楽しい!

INHAMBANE

MASSINGA

GAZA

XAI-XAI

穴場スポット　*Zongoene* ▲

シャイシャイから、直近のミクロな景勝地ゾンゴエネ（シャイシャイ市の脇を通るリンポポ川の河口）。国道1号線からターンオフすること1時間、更に徒歩2時間かけて辿り着く秘境だが、アクセスの悪さが幸いして、本当に閑静でゴミがない浜辺に出会える。アフリカの喧騒に疲れて何もかもリセットしたい時には是非。近くにラグジュアリーなロッジもある。

APRESENTADORes

- SHOSUKE NOTO
- HIROSHI ITO
- RINKO MATSUYAMA

ニアサ湖へ
のんびり旅

ニアサ州といえばニアサ湖。世界で 9 番目、アフリカで3番目に大きい湖。深さでいえばアフリカ2番目誇る。
非常に広大なので船に乗ると海のように波がたつ。泳ぐと海と違い塩分が少ないために浮力が少なくとても大変。この湖は住血吸虫がいるので泳げないが・・・。外国人はよく泳いでいる。

おすすめは
リアルイチゴ狩り！

ニアサ湖の近くにはコテージもあり、リシンガまで送迎つき。ご飯もリシンガの街中で食べるよりおいしく、何よりゆったりした快適な時間を過ごすことができる。行くまでが過酷なのと、虫が多い、シャワーは湖の水という点以外はとても良い。

穴場スポット

◀ *O Trópico de Capricónio*

南回帰線が通っている。ただそれだけ。ただ看板があるだけ。それだけだが、赤道などに興味のある地理マニアの人には是非！

穴場スポット　*Pomene* ▶

マシンガの秘境。国立保護区に指定されている地域にあるリゾート地。といっても特に何もないビーチ。たまに、サルなどがいる。しかし、果てしなく広がる海岸線とまとまった波が魅力。イニャンバネはトーフやビランクーロだけではないのだ。行くのが恐ろしく過酷だが、興味のある方はぜひ。

モザンビークの小さな図書館

26-4次隊
行政サービス　藤田絵美子

モザンビークは海産物やマリンリゾートに恵まれている。Inhambane州ではマリンアクティビティ、Ilha de Moçambiqueは世界遺産としても有名だ。そんななか「すべてナカラで足るからそれほど興味がわかない。」前総代表の藤田絵美子隊員は話す。彼女は行政サービスとしてインフラ整備局にて現地人の生活水準の向上に励んでいる。人望も厚く、隊員だけではなく、現地で働いている日系コンサルティングの方々からも頻繁に声がかかる。

彼女曰く、ナカラにはモザンビークの良いところ全てが詰まっているそうだ。アクセスもよく、ナカラ回廊の終着点として道路も舗装されている。ナカラの街はAltaとBaixaによって構成されており、特にナンプラ州の平原風景からナカラ入り口の大型工場群を抜け、Altaから一望するナカラの市内は絶景だ。街全体が一望できる上に、海との森のコントラストがなんとも言えない。「足る。」というだけあり、港（モザンで唯一のクレーンが有名）、海鮮物、ビーチ、無人島、SPAR、綺麗な宿泊施設、工場とあげればキリがない。

そんなナカラにまた一つ新しい施設が藤田隊員によって追加された。「Biblioteca de Nippon」（以下図書館）だ。図書館は街の中心部から徒歩10分ほどのところにある。図書館に近づくと、子供達の歓声が聞こえてきた。外国人が多いナカラでは、子供も対外国人への免疫ができているのか、他の地方の子ども達のように遠巻きに見つめることもない。子供達は笑顔で出迎えてくれ、手を引きながら案内してくれた。中にはすでに本を読む子ども達、映画を食いつくように見る子ども達で賑わっていた。来館している子ども達のほとんどは小学生の年齢の子が多く、本に触れたことがない子供達はそこに書かれた鮮やかな絵や写真に魅了されていた。ポルトガル語が読めない子供達には藤田隊員が読み聞かせをしているという。今日はナンプラから隊員が遊びに来ていたため、小学校で指導経験のある島田隊員の読み聞かせに多くの子供達が引き込まれていた。

活動外にも出来ることを

「赴任してからは言語にも慣れなくて、思うようにいかなかった。でもしばらくして時間の余裕ができたときに、ふと、もっと出来ることはあるんじゃないか。」「出来るならば何がしたいか。」と思ったの。

「そしたら自分の好きなことをしようと思って。そう考えたら図書館が一番に思い浮かんだの。」子供の頃から読書を愛してきた藤田隊員はモザンビーク人にも是非本に触れて欲しいと語る。公共の図書館が存在しないナカラでは本に触れる機会は大変貴重だ。学校にも図書館は併設されているが在学生の利用にほぼ限られる上に、冊数は乏しい。しかしBiblioteca de Nipponに保存されている本は現在までに100冊ほどで日本語の本からポルトガルの本まで多岐にわたる。それらはプロジェクトで得た資金から購入したものだけではなく、ナカラに駐在するコンサルタントの方々などのモザンビーク在住の日本人、更に日本にいる藤田隊員の友人達からの寄付された本も含まれており、藤田隊員の人柄も伺える。

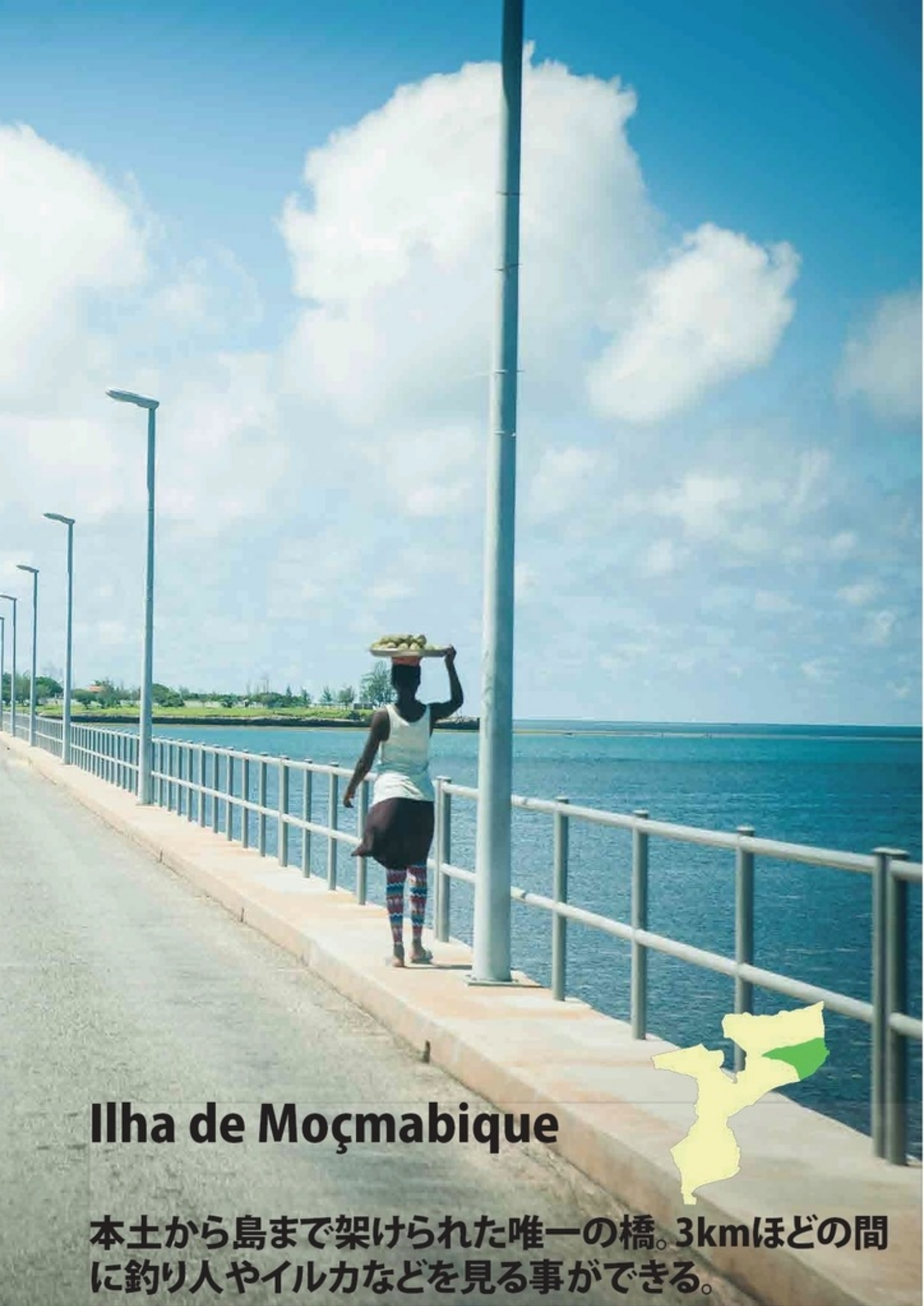
現地業務費では実現できなかった

設立は「小さなハートプロジェクト」https://www.sojocv.or.jp/mbr_support/heart/project/index.cgiの支援によって行われた。小さなハートプロジェクトとは、一般社団法人協力隊を育てる会の中の一プロジェクトで、協力隊員が活動を進めて行く中で垣間見る地域の問題の解決に支援をするプロジェクトである。約30万円までの支援を受けることができ、主に教育関係、衛生関係などが対象となる。現地業務費では活動内の範囲内に限られるが、このプロジェクトでは活動外に限ったコミュニティへ寄与するものが対象になる。「2回の申請でやっと支援を頂けるようになった。」申請書もコミュニティについてコミットしたもの、持続性のあるものが対象となり、審査も厳しい。彼女の熱意は強い。申請が8月に通り、資金提供を9月に受け、設営場所に困り知り合いのナカラ市役所職員に相談したところ、快く公民館の使用の許可がおりた。その後スムーズに作業が進み、11月に開館に至った。

まだまだ発展途上

図書館といえば来館者が自由に手に取ることができるが、本に触れたことのない子供達は文字通り食いついて貪るように読むため、本を破いてしまったり、口に入れたりしてしまうそう。「そのため本はすべて一室にて管理し、本を配布する形で管理している。」しかし、最近は子供の数が増えてきたため目が行き届かないことも悩みの一つになってきており、「読み聞かせができないので言語に触れさせてあげられない。」と現状を話す。

管理は主に藤田隊員とモザンビーク人2人の3人で行なっているが、本の管理になるとなかなか上手いことがいかない。「今後は後任が来る予定なので引き継ぎはできるが、最終的にはモザンビーク人に管理してほしいし、本も増やしたい。開館してすぐに離れてしまうのは残念。できれば戻って来て図書館を訪れたい。」任期が終了してしまうことを名残惜しそうに語っていた。



Ilha de Moçmabique

本土から島まで架けられた唯一の橋。3kmほどの間に釣り人やイルカなどを見る事ができる。

養蜂

養蜂って
どんな活動
してるの？

コミュニティー開発って活動範囲が限られておらず、いわゆる「なんでも屋」と言われることもありますが、実際どんな活動をしているのでしょうか。モザンビークのイニャンバネではネリカ米に加えて養蜂が活動の一つとして行われております。今日は同じ国内にいながらなかなか知ることのできない実態を日本でも養蜂家として働いていた2016-4寺田隊員に新人ミツバチ君が直撃してみました。

・寺ちゃんさんこんにちは
まず簡単に自己紹介をよろしくお願いします。

こんにちは。イニャンバネ州ザバラ郡の寺田です。SDAEという経済活動事務所で活動をしています。活動内容は、主に養蜂専門の同僚と二人で養蜂農家を回り、技術指導をおこなっています。モザンビークに来るまで二本松の養蜂場で3年間働いていました。大学生の頃から勉強をしているので、今年で養蜂歴が10年になります。

僕（ミツバチ）は何をしたらいいんですか？

ミツバチ君には半径数キロ範囲から蜜を集めてきてほしいんだ。あとはこれから生まれてくる妹たちの世話もしてね。
僕は君たちが集める蜜が誰かに盗まれたりしないように対策を立てたり、効率よく蜜を集められるようにお手伝いしているんだよ。僕はお手伝いをするだけで、君はお姉さんから空の飛び方や、蜂蜜の採り方を習うんだ。

妹や姉さんってことは。。。もしかして一人称は僕じゃなくて私なんですか？

そうだね。きみたち働き蜂は全員女の子だよ。君たちの家族は、お母さんである女王蜂と、君たち働き蜂が9割、そして男の子の雄蜂が1割いるんだよ。

どこから集めてきたらいいですか？

モザンビークではココナッツやカシューナッツ、マンゴーなどたくさんあるからその花から蜜を集めてきてほしいな。

新人の私でも集められるかな？

きみたちのお姉さんが教えてくれるから大丈夫だよ。生まれたばかりの君たちは、箱の中で3週間巣の掃除をしたり、赤ちゃんの世話をしたりするんだ。3週間の内勤が終わった後は、外に蜜を採りに行くよ。日齢を重ねていくたびに、遠くに行く危険な仕事になるけど、とてもやりがいはあるよ。
でもなかなか見つからないから僕たちも植林をして君たちの採蜜のお手伝いはするからね。森林伐採が問題になっているけれど、養蜂そして、僕たち養蜂家は木を切ることはないから、自然とともに成り立っている産業なんだ。

私たちが集めた蜜をどうやって管理しているんですか？

それは君のきょうだいたちが、羽で水分を飛ばしたり、特別な酵素を入れて腐らないようにして保存しているんだ。花の蜜と蜂蜜は成分が全然違うんだよ。蜜を集めて巣に溜める性質があるから、君たちの名まえは「蜜蜂」なんだ。

放っておくとどうなるんですか？

放っておくと蜜が腐ってしまったり、蟻やネズミなどの他の生き物に食べられてしまうんだ。そうなると君たちは死んじゃうか、家を捨てて引っ越しをしなくちゃいけないよ。

管理とか大変そうですね。

そうだね。モザンビークでは特に伝統養蜂と言われる方法が主流で箱を壊してから採蜜をするからすごく非効率なんだ。だから2012年からJICAの専門家の指導の下、隊員を通して効率の良い、収入向上の望める近代養蜂の普及に励んでいるんだ。
普及ももちろんだけれど、村人たちのグループ作りや巣箱の発注先の探索などいろいろしているよ。
またイニャンバネの隊員間では、地域会のたびに養蜂の話で盛り上がっているよ。ワッツアップで活動の写真を送りあい、時には電話で1時間以上話をすることもあるよ。グーグルドライブやFacebookなどのSNSを使い、他国の養蜂の活動を行っている隊員とも情報交換をしているよ。

がんばって集めた僕たちの蜜を無駄にしないでほしいな。

伝統養蜂だと赤ちゃんや花粉なども一緒に絞ってしまうけれど、近代養蜂だとハチミツだけをとることが出来て、雑味のないおいしいハチミツが出来上がるんだ。

だからあまり刺さないでほしいな。

でも僕たちは誰か来たら蜜が盗られちゃうと思って守らないといけないし。
たくさん刺されちゃうとアレルギー反応を起こして、最悪死んでしまうから、遊びに来るときは、僕たちに煙を掛けて大人しくさせて、防護服を着てきてね。

ちなみに僕は蜂の針を使った民間療法が得意です笑、それはまたの機会に。

モザンビーク人はハチミツが好きなのかな？どうやって食べているんだろう。

モザンビーク人は、ハチミツが好きだよ。薬のような物としてハチミツを利用しているよ。日本と一緒で、健康に良いという事は認知されているよ。咳を止めるためにそのまま食べたり、アナベラ先生は風邪の時に、ショウガやレモンと一緒にお湯に溶いて飲んでいたよ。
今同僚と一緒に考えているのが、カシューナッツのハチミツ漬けだよ。炒ったカシューナッツにハチミツを漬けるだけで簡単にできるから、隊員の皆さんもやってみてください。

次のページでハニーナッツのレシピ紹介!!

テラおやじのハニーナッツ

用意するもの

フライパン
空き瓶
カシューナッツ
蜂蜜

ドミでのおつまみに。

カシューナッツを炒める。水分を飛ばすことで長期保存ができるように。

1

ナッツを軽く冷まし、熱湯消毒した空き瓶に入れる。

2

2の瓶に蜂蜜を注ぐ。
ナッツが全て浸るまで。

3

味が馴染むまで10分くらい置く。
漬けおくほどに、風味や食感が変わる。

4

SNAP

カプラナコレクション

私は、CAPULANA。

カプラナとは、モザンビークの伝統的な布である。普段から巻きスカートとして使われているのをよく見かけるが、用途は様々で、子どもを抱っこする際に使ったり、露出を控えるべき教会でスカートやショール代わりに巻いたり、お金を隠したり、レジャーシートのように使ったり…。モザンビークの女性のカバンの中には必ずと言っていいほど、カプラナが入っている。このカプラナの布を使い、女性も男性も洋服を作る。また、モザンビークでは家族ごとにおそろいのカプラナを持っており、結婚式（XIGIANE）ではそのおそろいのカプラナを身に着ける。

カプラナを使った商品も多様にあり、お土産にもぴったりだ。

被害住民からの悲痛な叫び

飛行機でマプト国際空港に到着する際、近くの広場から何かが燃えているような黒煙が上がっている光景を見たことがあるだろうか。

1970 年代にマプト市が管理を始めるまでは、フレン最終処分場は不法のゴミ堆積場であった。17 ヘクタール（東京ドーム約 3.5 個分）の面積を持つこの処分場は、世界銀行の協力も受け、マプト市によって管理されており、オープンダンピング、つまり何も処理されずにマプト市内のすべてのゴミがそのままそこに投棄されている。ゴミから滲み出る汚水（浸出水）の処理施設やゴミの焼却処理、ゴミから発生するメタンガスの処理設備など、何もない状態で運営されており、周辺地域への深刻な環境汚染が懸念されている。毎日約 900 トンものゴミが処分場に搬入され、その中から金属やプラスチックなど換金できる資源ごみを収集するウエストピッカー（catador）が 1 日に数百人程活動している。すでに処分場の許容投棄量は越えており、これ以上の投棄はゴミ山の崩落などの危険性があるため、隣接するマトラ市に衛生的に処理をする処分場の建設が提案されていた。

が、2018 年の 2 月 19 日の未明、処分場の入口から反対に面の一部分が大雨による影響で崩落し、近隣住民約 17 名が犠牲となる事故が発生してしまった。事故発生後、周辺住民の住居は撤去され、「60 日以内には処分場を閉鎖する」との方針を掲げたものの、肝心な代替の処分場候補地が住民の反対などで進展されなかった。現在もフレン最終処分場の閉鎖はされておらず、マプト市内のゴミが継続して運ばれている。

「私たちは何か悪いことをしたのだろうか。」
「なぜ私たちがこのようなこと（崩落による被害や、それによる強制退去）を被らなければならないのか。」

被害住民からは悲痛な叫びが上がっていた。
果たしてこの事故は大雨による自然災害なのか、はたまた人の手による人災なのか。

2016 年度 3 次隊
環境教育
佐野　卓也

今、私たちにできること

ゴミの発生量削減のための手法である３Ｒ（Reduce, Reuse, Recycle / Reduzir, Reutilizar, Reciclar）や、生ゴミを堆肥化するコンポスト技術、分別収集など、ゴミを減らす技術・手法は多く存在し、その活動の啓蒙・普及が急がれる。高度経済成長期の日本でも、工場から海や川へ汚水を未処理のまま排水されていたり、街中では人々がゴミを路上や河川にポイ捨てする光景が日常茶飯事な時期が存在したりしていた。そしてその生活スタイルによる公害も経験し、多くの被害を出している。その教訓を活かし、その後は経済発展とともに環境意識も向上し、現在のような衛生環境が保たれている。そのような経験がある日本が、モザンビークや他の発展途上国に同じ経験をさせないためには、どうすればいいだろうか？

「私１人くらい何もしなくても大丈夫でしょ。」
「私１人くらい何かしたって大して変わりはしない。」

その「私１人くらい」が、このような処分場崩落事故を引き起こす要因の一つにもなれば、そのような悲惨な事故を防ぐ“大きな力”にもなる。

私たちには、何ができるだろうか？

02 ～MAPUTO ドミトリー近郊編～

Assosiação dos Músicos Moçambicanos

ライブスペース

水曜夜にモザン人の生演奏がきけるライブハウス。入場はフリー。ドリンク有。

Av.EDUARDO MONDLANE

Av. VLADIMIR LENINE

文化センター

音楽イベントが開催されたり、アートギャラリー、カフェなどがある。建物自体もおしゃれ。フラ語のレッスンもしているらしい。

Av.24 de JULHO

Centro Cultural Franco Moçambicano

JARDIM TUNDURU

Centro Cultural Brasil Moçambique

文化センター

ブラジルの文化センター。展示会やイベントなどを行っている。

Av.25 de SETEMBRO

GUNGU 劇場

吉本新喜劇並みに笑いが起こる。
金・土・日・祝日の夜
250MT でみることができる。

FEIMA

Hospital Central de MAPUTO

BAIRRO
カフェ＆雑貨

カプラナを使ったかわいい雑貨が置いてある。奥はレストラン・バーになっており、おしゃれな店内が広がっている。

ギャラリー＆雑貨

アート作品が見れたり買うことができる。そのほか本や家具、洋服やアクセサリーなども売っている。日曜日はイベントを行うこともあるそうなので オーナーにきいてみるとよいかも。

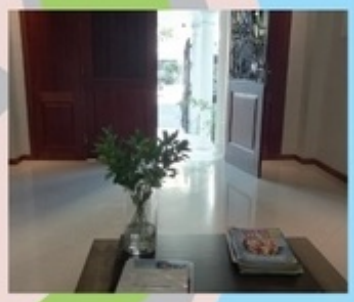
JICA

DEAL

dormitorio

BODY CARE
サロン
8:00 ～ 18:00

ヘアケアー、エステ、ネイル、脱毛など、すべてそろっているサロン。とてもきれいでサービスもよい。価格も日本より安く、個人的には下手な日本のサロンに行くより数倍いい。



KWETU

カフェ＆雑貨

11:00 ～ 21:00

ランチタイムに行くと plato do dia(鶏、ミートボール、魚、ヤギ等種類豊富）が 300 ～ 500Mt で食べられる。野菜が充実したプレートなので女性におススメ。土曜日はイベントをしていたり、平日とは違ったメニューがあるらしい。

03 ～NAMPULA 市内編～

ナンプラの観光情報

第三の都市といわれるほど大きくもないナンプラですが、意外と面白いところもあるんです。中華ショップは片手では足りないほど、そして中華料理屋はなんと全部で５件（ニラ餃子、火鍋もあり）。ザンビア名物のシャワマ（ケバブサンドの鳥バージョン）。そしておススメの日曜市。マコンデ族の伝統彫刻や貝殻の装飾品など北部独特のものも多く楽しめます。

シャパ停留所

お土産市

博物館

中華料理店

火鍋店

シャワマ屋

日曜市

Nampula

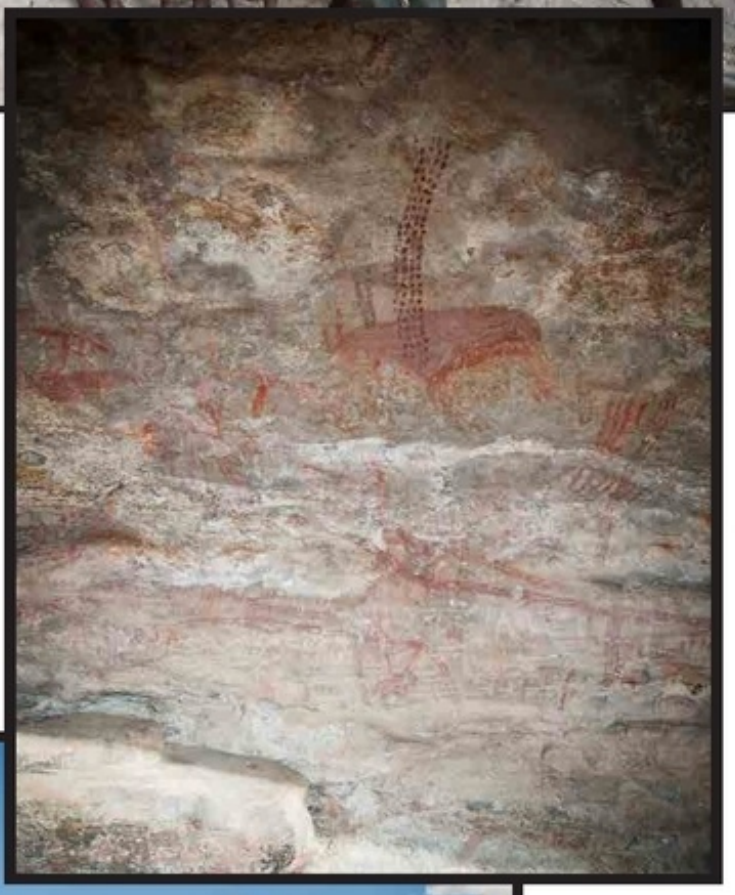
毎週日曜日に開かれる市場。本当になんでも安価で購入ができる。北部のお土産は是非ここで。

北部の奥地に潜む観光地

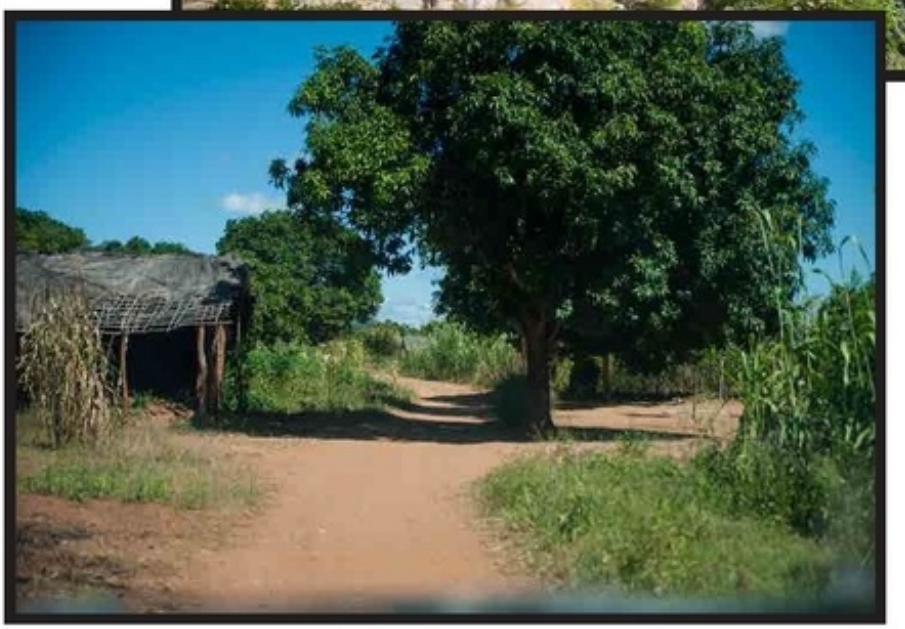
赴任して行われるオリエンテーションで渡されるMaputoの危険マップ以外にもう一枚渡される州、ナンプラ。女性の派遣禁止（cidadeに限る。）とされ、訪れたことのない隊員には危険という印象を与え、なかなか訪問者の少ない州。そしてほとんどの訪問者がNacala、Ilha de Moçambiqueに直行するなか、それらにも劣らない隠れた観光地が存在する。

Rock Art Africaと検索すると、真っ先にタンザニアやマラウィ、南アフリカなどが上がってくる。これらはUNESCOに登録されたOfficialな観光地で、且つ観光地化されており、アクセスやガイドなども充実しており十分に楽しむことが出来る。しかし、Rock Art（Arte Rupestre）はナンプラにも存在する。Rebauéだ。Rebauéは水の生産地として有名でナンプラ市内から車で大よそ2時間ほど北に走った所に位置する。高地にあり、気候も安定しており、農業のポテンシャルは高く、NPOもハウス農業を行うなど活発的で、現地人も野菜などを買い付けに来る人も多い。

そこから1～2時間ほど走った辺りにそのArte Rupestreは点在している。もちろんガイドなどはおらず、道行く人々に訪ね歩く必要がある。今回訪問したのは「ムゼ村」にあるAtre Rupestreだ。舗装された道路を外れ、4WDで砂地を行くこと1時間。ムゼ村は観光地という言葉とは程遠く、案内看板やレストランなど皆無。ここからはムゼ村の村長と連絡を取り（これはモザンビークあるあるなのかわからないが、新参者は村の村長に入村のご挨拶が必要らしい。）、村長をピックアップした後、山の管理人のところまで案内してもらう必要がある。



着いてすぐ管理人に挨拶をし、入山の儀式を行う。（しかし今回は省略して入山した。理由は不明。）ガイドとして管理人が付き添うが1人ではなく、家族全員参加の大所帯だ。10人以上のパーティを組んで、山の麓から壁画のスポットまで林をかき分け、道なき道を行く。急斜面を上り下りするため、普段なれない我々はガイドの助けがなければ到底上ることが出来ない。裸足で上っているガイド達（子供）には本当に感心する。途中枝豆のような見た目のFeijão Macacoというものがなっており、おいしいのかと思いきや、細かい毛が手に刺さり、かゆいかゆい。1時間ほど上ると眼下に圧巻の景色が広がる。普段エメラルドグリーンの海ばかり見ているが、ダークグリーンの森の海もいいものだ。



実際の壁画に関して、ガイドは知識を持っておらず「この線みたいなものはなんですか？」と尋ねても「線路です。」と答えてくる。そんなことはあるわけもなく、いつ書かれたのかも不明とのことから、どういう意味なのか、どのようなライフスタイルだったのか我々の想像力を掻き立ててくる。

Xai-Xai

Xai-Xaiにあるビーチ。海水浴のみならず、採りたて牡蠣が堪能できる。

「M」

Daisuke KOBAYASHI

いま、マプトから始まる連想ゲームに参加したら、「Millennium bim」と答える。それくらいあのロゴが自分の中でまばゆさを増している。M のオリジナルフォント。ブランドカラーのピンク色（Pantone 17-2034 / PinkYarrow ?）。銀行らしくない色がどうして選ばれたのか。検索してみたら「Pink Yarrow は職場環境、家族、人間関係の中で適切な境界線を引くことを助けてくれます」という一文が。「パワー・オブ・フラワー・ヒーリング・エッセンス」の世界ではそうとらえられているという。なんだか銀行にふさわしい気がしてきた。とにかくこのロゴは多幸感を与えてくれる。眺めているだけでご飯を 3 杯食べられそうな気分になる。マプトを市内観光するなら、Millennium bim と宣伝契約した Pink Yarrow カラーの txopela を推したい。

次に「これこそマプト」と最近思ったのはアナベラ先生が着ていたミリタリー風のワンピースだった。「それ、どこで？」と私が聞くと、先生は「Xipamanine よ」と勝者の微笑み。欧米か届く Calamidade(義捐物資) の洋服は大袋 1500Mt ほどで Xipamanine の市場で取引されている。あの袋はマプトのアイコンだろう。先生は掘り出し物が好きでよく探しに行くといい、その一着は 120mt で買ったと誇った。まさに戦利品だったのだ。

JICA 事務所の裏通りにアトリエ兼ショールーム「DEAL - EspaçoCriativo」を運営する画家の Guambe 姉妹によるファッションブランド「Ketiketimoz」から私はマプト・ファッションの哲学を学んだ。紳士物のスラックスを女性服のあえて「上着」にリメイクするところにアーティスト姉妹のヒネリがある。（大したものが売っていない）マプトで素敵なモノを手に入れようと思ったら、素材を掘り出すこと、見立てること、作り直すこと。それが金科玉条だと思う。

ミリタリー風と言えば、共産主義に基づく革命国家を目指したこの国の歴史、そして長引いた内戦の記憶。ミリタリーはこの国の絶対的キーワードだ。その名残りの体現者と言えるのが「Guarda さん」だろう。軍服に味がある。その姿にマプト風情の片鱗が宿る。風化したビルにも同化している。いつかそんな彼らの写真集を作りたい。

われわれだってミリタリー風の服を身にまとって闊歩すれば「コミュニズム散歩」が楽しめる。マルクス、毛沢東、レーニン、金日成。さらにアフリカ諸国の独立の父である革命家たちの名前が付けられた通りがあちこちにあるこの街。モザンビーク愛にあふれるなら

combatente da Luta de Libertação Nacional で殉死した国民的英雄たちの名を冠した通りを一巡してもいい。偉人の名前を刻む看板に向かって一礼してセルフィーに収まり、20 世紀の激動の歴史に連なることもできる。

マプトを逍遥する幸せの源はその建築にある。Art Deco や Tropical Modernism に関心がある人には特に。個人的にはそこにインド・ゴアからの移住者が建てた 20 世紀初頭の住宅も加わる。ポルトガル人たちを「追い出した」あとに、技術的な問題や内戦もあって新しい建物を作ることが出来きなかった。だから「当時の先端」がホコリをかぶりながらそのまま残っている。それがマプトの都市建築群の大きな特徴だろう。

ポルトガル統治時代の往時 5〜60 年代マプト建築の見所は、光や風を通す穴の幾何学的配列だ。町のアイデンティティといえるこの配列をデザインソースとした家具がある。Piratas doPau の「25s32e」シリーズがそれ。概ねリサイクル素材で作られ、デザインはマプト在住のオランダ人とリスボン在住ポルトガル人が担当、貧困地区 Junta の青年に技術を教え、雇用を創出するというスキームで仕上げられる。ドイツの援助機関 GTZ が職訓プログラムで関わっている。

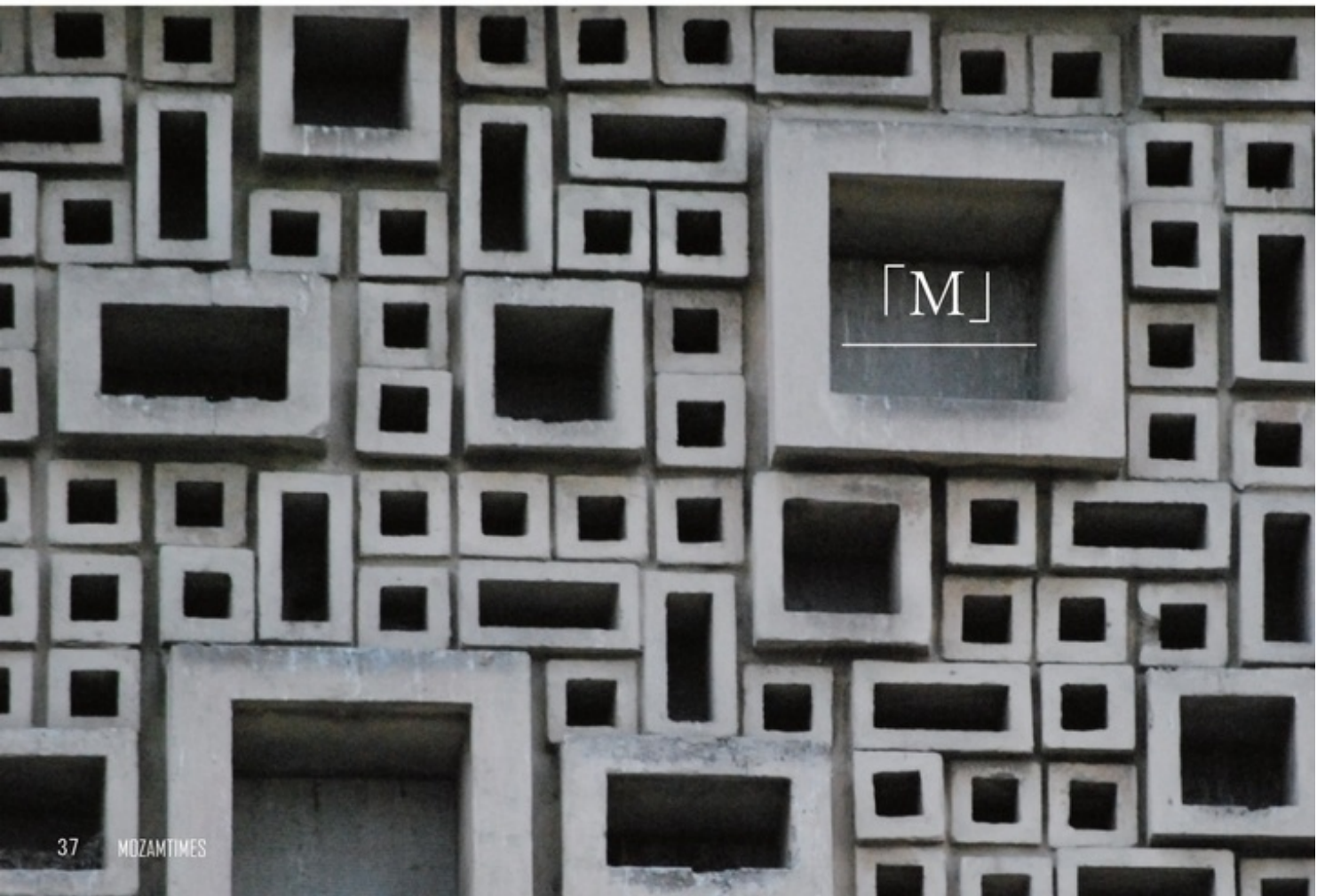
「a better world through creativity」をテーマに、アフリカ各地のデザイン情報を提供し、展示会も毎年開催する DesignIndaba の Africa, now でも同シリーズは脚光を浴びた。Design Indaba のサイトにはアフリカ発の未来を作ろうとするデザインやアイディアで溢れている。私もそうなりがちだがアフリカを一括りにしたり、アフリカなんてしょせんと思ったりする人は Indaba で情報をアップデートしていく必要があるだろう。

さて、わざわざここに記すまでもなく、世界に誇る独創的な建築を作り続けた Pancho Guedes の建物もまたマプトの代名詞だ。エッフェルの事務所が関わったという触れ込みの駅舎には関心を払わない私も駅前広場に立つ Prédio Abreu Santos e Rocha は見るたびに感動させられる。そして Av Eduardo Mondlane の TxhapoTxhapo Restaurante で食事するときはその目と鼻の先に建つ PrédioO Dragão の小石が一面に埋まった壁のお参りを欠かさない。マプトの Pancho 建築を探し求めてやって来た白人の学生を描いたロードムービー風の短編「À Procura de Pancho」が YouTube や Vimeo で鑑賞できるので時間があればぜひ。

建築については書くことが多すぎるので、関心がある人向きには「Maputo - Archtectual and Tourist Guide」という一冊がバイブルに。またモザンビークの各地の建築を紹介した観光ガイド「Mozambique-Archtectual and Tourist Guide」もある。著者はモザンビークのドイツ大使。

唐突ながら、マプトからイニャンバネまで 480km、ムججバネ（スワジ）まで 214km、ヨハネス（南ア）まで 544km。道路状況を考えればイニャンバネよりも隣国の経済都市に行く方がアクセスがずっといい。商品流通だけではない、アーティスト同士の交流もそちらのほうが自然と盛んになる。お気に入りのマプトのインディペンデントレーベル Kongoloti Records もモザンビーク人以外の比率のほうが高いくらいだ。

モザンビークの文化芸術振興はノルウェー政府の支援が目立つが、南部アフリカの音楽のプロモーションプロジェクト「Concerts SA」もまたノルウェー援助によるもの。このプロジェクトが関わるコンサートは面白いのでぜひ。



Kongoloti Records 所属のモザンビーク人では Nandele Maguni が作り出す音響の世界に独自の奥行きがある。Boombap、Dubstep, Psychedelic TrapBeat というジャンルでくくられる一方、ファーストアルバムの制作に際してはカーボデルガド州の奥地で数週間過ごしマコンデ族のイニシエーション「likumbi」を体験したりルーツに降りていく音楽作りを意識している。独立後の Rádio Moçambique 初代ダイレクターを父親に持つ音楽エリート。毛沢東通りに事務所を構える Mahla Filmes が制作を手掛けた「Fin o Humano」のビデオクリップはマプト市街をゆらゆら歩きめぐる Nandele の姿を撮影した作品だが、私がもし監督だったら一。レーニン通りにある Millennium bim で札束を引き出す彼、Pink Yarrow の txopela に乗り込む、安全を確認する Guarda さんの眼光、顔に刻まれた深いシワを冒頭で映し出しただろう。

白牌のすゝめ

Recomendo a Depilação de V

ひとつアフリカに住む女性隊員に
おすすめしたいことがある。
これは日本よりも過酷な生活の中で衛生
的に体を保つための一つの提案である。

先日、モザン人の友人と、下の毛の話になった。日本人の大半は処理しないという話をすると随分驚かれた。なぜ？という質問に対して、江戸時代、遊女がどうやらアンダーヘアーを短くしていたらしいという無駄な豆知識と、銭湯・温泉文化から理由を説明するのはたやすいが、実際のところあまり深く考えたことなどない人が多いのではないか。ただみんなそのままだからそのままにしている人が大半なのだ。

パイパンの語源を調べると、何も描かれていない真っ白な麻雀牌(白牌/白板)からきているらしい。なるほど、随分男性的な発想だ。昭和、たばこの煙で白くなった雀荘内、ジャラジャラと聞こえる麻雀牌の音、深夜３時、大して実りもない会話、この前行ったソープの話、そんなところから生まれるパイパンの隠語。まぁ想像するにそんなところだろう。決して定かではないが。もしこの単語を男性名詞か女性名詞か決める権限が私にあるなら、間違いなく前者に一票を投じる。

いや、長い前座になったが、その友人との会話がきかっけで、実は先日、ブラジリアンワックスを初めてやったのだ。ブラジリアンワックスとは、アンダーヘアーの脱毛方法の一つであり、脱毛ワックスを使ってムダ毛を毛根から抜くのだ。まぁご想像通りこれが痛い。痛いが我慢できなくはない。ドラマ、SEX and the CITY をきっかけに注目が集まりこれができるサロンが日本でもだんだんと増えてきている。検索するとドミトリー近くのビューティーサロンで取り扱っているとの情報があり、日本よりもはるかに低価格(500MT ～ 700MT)だったので、とりあえずやってみることにしたのだ。どうせ誰にも見せる予定はないのだから、恥ずかしいとかそういう意識もなく、あぁこれも異文化理解の一つだななんて思っているうちに、私の初体験はものの 15 分程度で終了した。終了したての感想をいうなら、小学校時代の旧友に久しぶりにあった時の感覚と似ていた。「あれ一めっちゃ久しぶりやん！元気にしてた？（あれ、この子こんな顔だっ

たかな）え一全然変わらなーい！（…なんか老けたな）」まぁそんな感じ。今思えば、私はなんのために、だれのために伸ばしていたのか。わからない。だからあえて問う。あなたはなんのために、だれのために毛を伸ばしているのか。この脱毛のメリットは、短時間でキレイになり２～３週間脱毛効果が続くこと、ムレや雑菌の繁殖を防ぐことがあげられる。断水生活の中で日本のように毎日お風呂に入ることが難しい時も多々ある私たちにとって、衛生面において大きなメリットが得られるわけだ。メリットを挙げたなら、同時にデメリットも挙げなければならない。まず、痛い。そして、肌へのダメージがあるかもしれないこと。ちょっとした刺激にも弱い人には不向きだろう。しかし、何の理由もなく処理していないという人にはとりあえずやってみることをお勧めする。何もここでやらなくてもいいではないかと思ったあなた、アフリカにいるからこそやるのだ。誰のためでもなく自分のために。

Inhaca, Maputo

Inhaca島は首都で疲れた身体を
癒してくれる。

執筆協力者
(Colaboradors)

モザンビーク事務所
ボランティア調整員小林　大祐

27-4 行政サービス
藤田　絵美子

28-1 コンピュータ技術
北橋　雅子

28-1 理学療法士
久長　竜太

2016-2 コミュニティ開発
伊藤　洋志

2016-3 数学教育
松山　倫子

2016-3 環境教育
佐野　卓也

2016-4 コミュニティ開発
寺田　篤哉

2017-1 青少年活動
小原　智恵

2017-1 PCインストラクター
能登　翔涼

（敬称略）

編集者 OU 寄稿者 POR FAVOR!!

Mozam Timesは一緒に活動してくれる編集者および、寄稿してくれる方を募集しております。編集者の主な活動としましては「隊員や企業、法人、現地人への取材及び、企画、編集、写真撮影」などです。普段なかなか伺うことの出来ない隊員の話を聞くことが出来たり、ネタ探しに1人では行けないけれど、行ってみたいところがあるなど、取材を通して新たなモザンビークを一緒に発見しませんか？経験など問いませんので、ご興味がある方は2017-3東、2016-3横井までご連絡下さい。

また寄稿に関しては、分野など問いません。ここのレストラン美味しい！モザンのここおもしろい！などみんなにシェアしたい情報を是非是非寄稿ください。寄稿頂いた方にはささやかながら、マコンデ族の伝統工芸のPau Pretoで作った、キーホルダーを贈呈させていただきます！

Obrigado e Bom trabalho!

編集後記

先日友人のそれまた友人の家でのホームパーティーに招待されたのだが、それがまたものすごい家だった。部屋にはいくつかの絵画、アンティークのミシン、おしゃれな家具と食器、そしてマコンデ彫刻。なんだなんだこのマコンデが似合う家は!ひたすらそう思った。マコンデ彫刻が日常にある生活に、最近はこの上なく魅力を感じる。実は私の地元に、マコンデ美術館がある。その名の通り、マコンデ彫刻や仮面をひたすら集めた美術館だ。なぜあんな田舎町に、なぜマコンデなのか。理由は全くわからないが、中学生のころ一度だけ、その美術館に訪れたことがある。当時まだマコンデ族やティンガティンガなど全く知らず、好きな画家は印象派と井上雄彦だった私は、大して魅力を感じることもなく、なんだこのシュールな博物館は?ぐらいにしか思わなかった。それがまさか十数年後、アフリカに住み、そのマコンデに心惹かれる日が来るとは、当時の私はまだ知る由もなかった。今も驚きだ。そんなマニアックな美術館だが、日本に帰国後、アフリカが恋しくなった際はぜひ一度足を運んでみてほしい。ただその恋しさが満たされるかどうかは全く持って保証できない。

さてこの機関紙を作成するにあたり、多くの方からご協力いただきました。取材をうけていただき、また、お忙しい中寄稿いただき、誠にありがとうございました。今後定期的に発行していく予定ですので、次回はさらにより良いものを作れるよう尽力したいと思います。今回横井さんと二人での編集になりましたが、少しでも興味がある方がいれば、ぜひ一緒にやりましょう。いつでもお待ちしています。

東　知恵里

最近同僚とよく宗教の話になる。彼は敬虔なキリスト教でよくDeusが…と話す。その際に自分は何を信仰しているかと聞かれる。実際は何教徒でもないが、日本の文化的に仏教徒と答える。どんな宗教なの?と聞かれ、仏教には唯一神という概念がなく、数多なる仏が存在すると答える。するとそんなことは絶対にないと否定される。神は唯一だと。
そんな問答から仏教について少し調べてみた。
日本仏教は東南アジアの仏教から派生した大乗仏教が主流で、初期仏教とは少し概念が違う。大乗仏教の特徴には「空」という概念あり、個人的に、モノは実在せず刹那の連続で、故に不完全であり続け、完成することはないと解釈した。
日本絵画では長谷川等伯などが描くような空白(間)が美意識とされているが、その余白の不完全さを埋めるのは鑑賞する人に委ねられている。
活動においての不完全さを埋められることはできないし、ましてや2年間で完全にできることはない。空白を残し、その後に同僚または後任に繋げることが大切。そう思うと少し肩の荷がおりた。

さて、皆さん機関誌vol.2は如何でしたでしょうか。
今回は制作に当たり、隊員のみならず、小林調整員にまでご協力頂きました。活動がお忙しい中寄稿頂きまして、ありがとうございました。小林調整員の記事は赴任されて間もないにも関わらず、その着眼点と情報量の多さに、何度も読み返してしまいました。皆さんも新しい発見があったのではないでしょうか。

モザンビークの地理的影響から深めにくい隊員間の横の繋がりを深めたい一心で作成にあたりました。普段なかなか見ることのできない隊員の活動が機関誌を通して疑似体験できたらと思います。また今年度から総会のスタイルも一新されたことから、機関誌と合わせて多くの隊員と繋がり、イノベーションが起きることを切に祈っております。私も編集しながら、国内異動届を出さずに、明日にでも訪問したい衝動にかられてしまいました。(笑)
Vol.3の発行も検討しておりますので、興味がありましたら是非ご協力ください。

横井　隆宏

MOZAM TIMES

JICA　モザンビーク
ボランティア機関誌　2018-6　発行